

福島県文化財センター白河館収蔵

土偶の出土状況について

副主任学芸員 轡田 克史

1 はじめに

平成22年度、福島県文化財センター白河館まほろん（以下、「まほろん」とする。）は、「ふくしま里帰り展『ふくしまの土偶』と題する展示を企画した。平成22年9月25日から11月28日までまほろんで、12月7日から平成23年1月30日まで移動展として福島県立博物館において展示を行った。この展示は、かつて福島県内で発見され、諸般の事情により県外に収蔵されている土偶を「里帰り」させる企画であった。これらの土偶は、福島県発行の報告書や学術雑誌等に紹介され、土偶研究の基礎資料として活用されたものであったが、これまでほとんど福島県民の目に触れる機会がなかった。この展示ではさらに、里帰りした土偶と福島県内の市町村教育委員会等が所蔵する土偶とを併せて紹介することにより、表現の多様さや時期ごとの変遷など、福島県域の土偶をより深く理解していただこうと企画した（註1）。

この展示を企画するにあたり、土偶について複数のテーマで調査を行ったが、本稿はそのうち、土偶の出土状況について検討した内容を報告するものである。

2 土偶の出土状況について

土偶の出土状況については一般に、遺物包含層から土器などと同様に出土する、壊れた状態で出土する、あまり接合しない、などといわれてきた。しかし一方で、特殊な状況での出土例が認められ、遺物包含層出土の土偶とは異なる使われ方を示す可能性が指摘されてきた。

たとえば野口義麿は土偶について、「そのほとんどが、無意識に、不必要になったものを放棄したと考えられるものであるが、ときには、意識的に一定の遺構を設け、特殊の状態におかれて発見されたものがある」とした。そしてそのような状態を判断できる事例は「過去にのこされた縄文文化人の生活を復原するために、また土偶がもっていた役割を、直接知ることのできる貴重な資料でもある」として、土偶の出土状況が明らかな事例を紹介している（野口1974）。

また、米田耕之助は土偶が「土器・石器などと混在した形で、散在的に発見されることがほとんどであり、住居跡あるいは、特殊な施設に意識的に置かれた状態で出土する例は、極めてまれである」としたうえで、土偶の出土状況を「①：遺構に伴出する例、②：葬制に関する例、③：遺構はないが、遺跡内に集中して出土する地点がある例、④：散在的に出土する例、⑤：その他」と分類し、「①、②に関しては、土偶に対して縄文人の宗教的・呪術的等の意志を強く反映した結果によるものと思われ、意図的に特別に設けられた場所に安置した状況を示している」と結論した（米田1984）。

しかし多くの先行研究にもかかわらず、土偶の出土状況から土偶の役割、さらには縄文人の

生活を復原することに成功しているとは必ずしもいえない。これは“意識的に置かれた状態”で出土する土偶の絶対数が少ないからで(註2)、そのこと自体が土偶の性格を規定しているともいえよう。とはいえ“意識的に置かれた状況”の明らかな事例がわずかながらあることも確かです、そのような事例から縄文人の意識を探る努力も必要であろう。本稿では、まほろんで収蔵している土偶を対象に、その出土状況が記録されている事例を紹介したい。

3 まほろん収蔵土偶の出土状況

まほろんには、昭和41(1966)年以来福島県教育委員会が発掘調査した出土品が46,171箱(#32換算、平成22年12月末日現在)収蔵されている。その中で土偶は443点収蔵している(註3)。以下では、土偶のうち、遺構から出土し、出土状況に言及している事例を紹介していく。

(1) 磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡例

法正尻遺跡は、耶麻郡磐梯町と同郡猪苗代町の境界部分、猪苗代湖の北岸、翁島丘陵の北東部に立地している。縄文時代中期を主体とする集落跡である。東北横断自動車道(磐越自動車道)の建設に伴う発掘調査により、竪穴住居跡129軒、土坑759基、埋甕26基などが検出され、26万点にもものぼる土器片など、数多くの遺物が出土した。土偶は52点出土している。出土品のうち、縄文時代中期のもの855点は、東北地方南部と関東地方、新潟方面との地域間交流を物語る、特に貴重な資料であるとして、平成21年、国の重要文化財に指定された。

29号住居跡出土の土偶

29号住居跡は現況で東西10.4m、南北5.0mの長方形を基調とする竪穴住居跡である。33個のピットと、炉跡と考えられる焼土面が2カ所検出されている。ピットのうち、長方形に配置された15個が支柱穴と

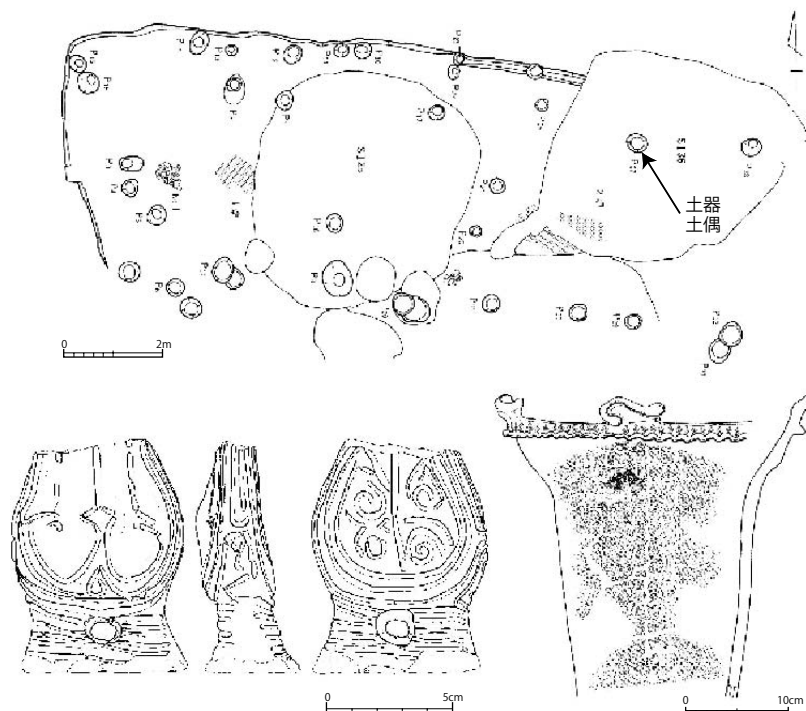


図1 法正尻遺跡29号住居跡例

考えられている。出土遺物及び遺構の重複関係から、大木7b式期の遺構とされている。

土偶は支柱穴とされるピットのうち、北辺を構成するピットから出土している。このピットでは、土器片が折り重なった状態で出土し、土偶はその下から出土した。柱の抜き取り後に埋納された状態かと思われるが、報告では言及されていない。

板状の胴部下半に脚部を付け、脚部中央に穿孔することで両足を表現している。文様は一部有節の沈線で描かれているが、ほぼ沈線と化している（註4）。

（2）飯舘村上ノ台A遺跡

上ノ台A遺跡は相馬郡飯舘村大字大倉に所在する。阿武隈山地の北部中央に位置し、付近には縄文時代の遺跡が多く存在している。本遺跡は段丘縁辺部に営まれた集落跡で、縄文時代中期前葉・中葉・末葉、後期前葉の各時期に機能していた。真野ダム建設に関わる発掘調査では、中期末葉大木10式期の竪穴住居跡が12軒検出されている。そのほか、配石遺構6基、土坑18基、屋外埋設土器5基が検出された。土偶は4点出土しているが、後期前葉とされる配石遺構に関連する土坑からの出土例、配石遺構からの出土例が特記されている。

4号配石遺構・6号土坑出土の土偶

4号配石遺構は、人頭大ほどの石約20個が 1.25×1.0 mの範囲に楕円形に分布していた。配石下に6号土坑が検出されている。土坑は長径2.35 m、短径1.5 m、深さ1 mほどで、平面形は楕円形を呈する。土坑埋土にも大形の礫が多く含まれ、配石遺構と土坑は関連するものと報告されている。6号土坑出土の土器などから、後期初頭から前葉の遺構と考えられている。

土偶は土坑の底面から出土した。報告では「右胸部の破片らしいが、沈線による渦巻文が見られる」とある。渦巻文や角柱状の形状から、ハート形土偶の胴部破片と見られる。土偶の出土状況については特に記録されていないが、本遺構が何らかの呪術的、祭祀的遺構である

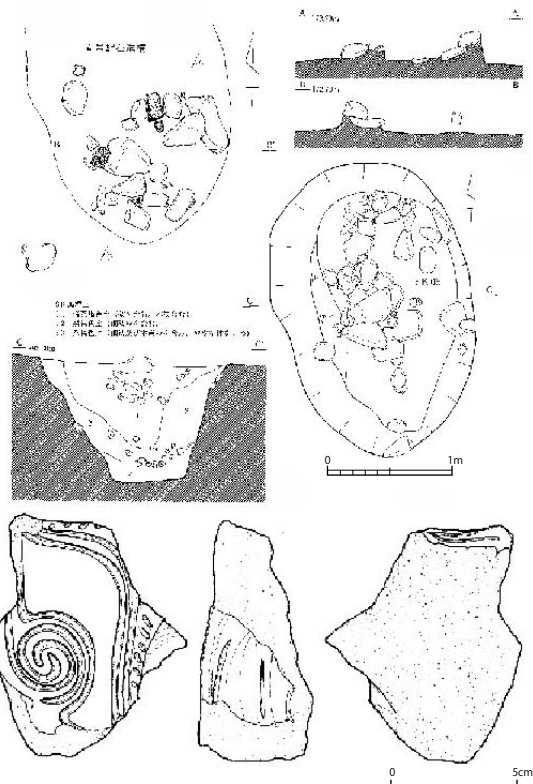


図2 上ノ台A遺跡4号配石遺構・6号土坑例

可能性が強いと報告されている。

6号配石遺構出土の土偶

6号配石遺構は 90×140 cmの範囲に、大きさの揃った人頭大の石約10個を三日月状に配した遺構である。遺物は土偶、石皿、石棒が各1点出土し、何らかの呪術的、祭祀的遺構である可能性が指摘されている。

6号配石遺構と重複し、より古い1号住居跡は、平面形が東西5.5 m、南北4.5 mの不整

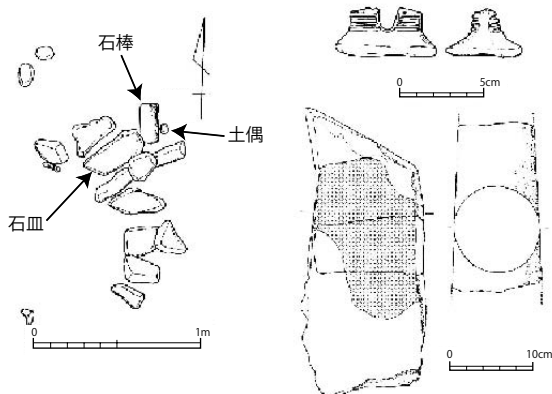


図3 上ノ台A遺跡6号配石遺構例

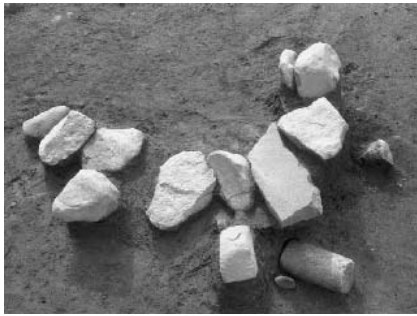


図4 上ノ台A遺跡6号配石遺構例

円形を呈する竪穴住居跡で、複式炉が1基検出されている。埋設土器から、中期末葉大木10式期に構築された住居とされている。この住居跡の埋没後に構築されたことなどから、6号配石遺構は後期前葉の所産と報告されている。

土偶は脚部の破片である。単脚で、中央に孔をあけることによって両足を表現している。横位の集合沈線が前後両面に施されている。報告では「後期前葉のものであろうか」とされているが、中期に遡る可能性があり、その場合、配石遺構に伴う事例でないかもしれない。むしろ、石棒と石皿の組み合わせに注目すべき事例とも考えられる。

(3) 本宮市高木遺跡例

高木遺跡は阿武隈川右岸の自然堤防上、本宮市高木に所在する、縄文時代中期後葉から後期前葉の集落跡である。阿武隈川右岸築堤工事に関わる発掘調査では、竪穴住居跡117軒、土坑235基、配石遺構66基、土器埋設遺構91基などが検出された。土偶は21点出土しているが、そのうち配石遺構からの出土例を2例紹介したい。

45号配石遺構出土の土偶

本遺構は、南北1.2m、東西0.8mの範囲に礫を集めたもので、平面形に規則性は認められなかった。他遺構との重複や下部施設は確認できなかった。

土偶は配石の上で、伏せられた状態で出土した。板状単脚で、頭部の一部と両腕が欠損している。報告では「鼻が^{くちばし}嘴

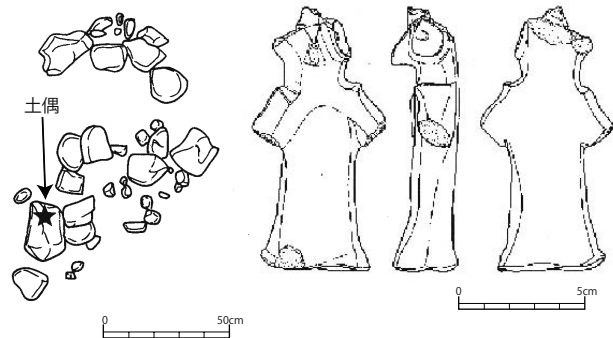


図5 高木遺跡45号配石遺構例

状に突き出し、目は顔の側面に大きくデフォルメされている。頭部は人をモチーフとしたものではなく、鳥などを象ったものと思われる」と表現されている。後期初頭と報告されており、ハート形土偶出現直前段階と見られる資料である。なお中野拓大によれば、大木10式、称名寺式期には鳥頭把手付土器の類例が多いという（中野1992）。本資料も鳥頭把手付土器と関係するものであろうか。

60号配石遺構出土の土偶



図6 高木遺跡60号配石遺構例

本遺構は南北4.0m、東西8.0mの範囲に広がっているが、細部を観察すると直径1.0m程のドーナツ状を呈した配石を、東西に連ねた形となっている。配石下に掘形などはほとんど認められなかった。出土遺物などから、遺構は中期末葉から後期初頭に属するとされている。

土偶は礫の南側で、土製耳飾りとともに出土した。板状単脚の土偶で、顔面の一部、両腕の先端が欠損している。

仮面をかぶったような顔面表現や後頭部の橋状把手などはハート形土偶の特徴であるが、板状単脚であることからすれば、やや古い段階に位置づけられる資料と考えられる。

このほか、本遺跡では25・26号配石遺構（単一の敷石住居跡）からも土偶が出土しているが、出土状況は明らかではない。

(4) 郡山市荒小路遺跡例

荒小路遺跡は郡山市の南東部、阿武隈川支流の谷田川河岸段丘上に位置している。母畑地区の圃場整備事業に伴って発掘調査が行われ、竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡1棟、土坑92基、配石遺構10基などが検出された。時期的にはほぼ縄文時代後期前半の集落跡である。土偶は56点出土しており、中には大英博物館で展示された土偶も含まれる（ただし遺物包含層出土）。

1号住居跡出土の土偶

1号住居跡は、平面形が東西5.0m、南北4.95mの隅丸方形の竪穴住居跡である。付帯施設としては、地床炉とピットがある。炉の南端には板状の石が立てられていた。この住居は火災にあった後、自然に埋没したとされている。遺物は土器片の他、土製円盤、耳栓、土錘などが出土し、土器の特徴から、本遺構は加曾利B1式期のものとされている。ピットは30個検出され、そのうち北壁よりには3個のピットが集中している。2個は細長いピットでほぼ並行し、もう1個の円形ピットが間に挟まれる形となっている。これは出入口部としてとらえられている施設に類似するものであるという。

土偶は、出入口部様施設のピットから、土器片3点、石鏃1点とともに出土した。ただし、出土状況について特記すべき点は認められなかった模様である。

土偶は踏ん張った左足部分の破片である。同時に引かれた2本の沈線により、菱形文を基本として描

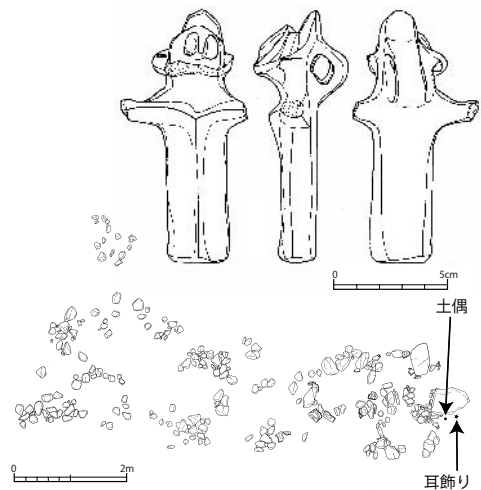


図7 高木遺跡60号配石遺構例

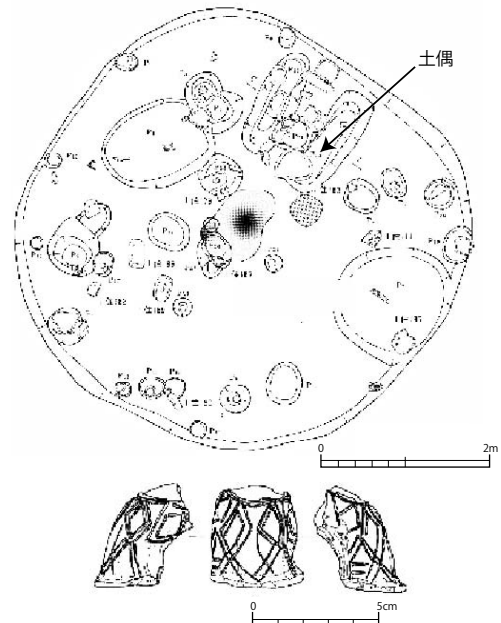


図8 荒小路遺跡1号住居跡例

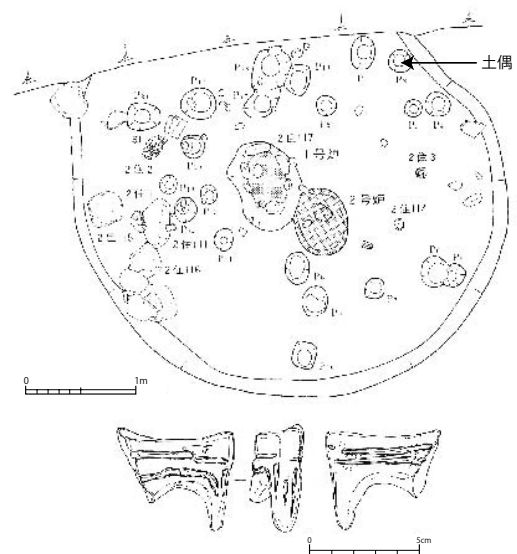


図9 荒小路遺跡2号住居跡例

いている。つま先部分には、足指の表現が見られる。プロポーションから見れば、ハート形土偶の系統に連なる資料であろう。

2号住居跡出土の土偶

平面形が直径3.9mの円形と推定される竪穴住居跡である。付帯施設は石囲炉・地床炉とピット21個である。ピットには柱痕が認められず柱穴は推定されていない。遺物は縄文土器、石器、土製品が出土している。床面出土の土器から、堀之内2式期の遺構と考えられる。

土偶は、水平に伸びた肩と垂下する短い腕部の破片である。沈線で短線・弧線を描いており、ハート形土偶に含まれる資料である。住居跡北東部に位置するピットからの出土であり、「呪術的な要因が感じられる」と報告されている。

(5) 飯舘村羽白C遺跡例

羽白C遺跡は阿武隈高地北部、相馬郡飯舘村大字大倉に所在する、縄文時代草創期から晩期にかけての集落跡である。真野ダム建設に伴う発掘調査によって、竪穴住居跡141軒、土坑501基、掘立柱建物4棟などが検出された。土偶は120点出土している。

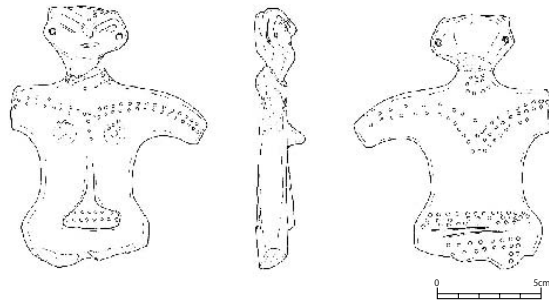
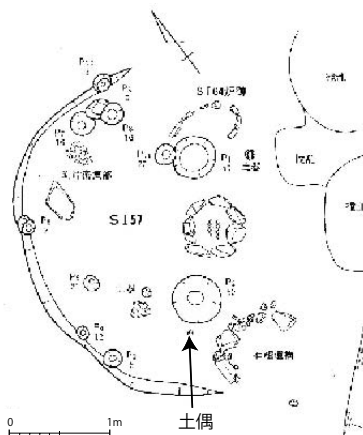


図10 羽白C遺跡出土土偶

362号土坑出土の土偶

本事例は、出土状況が記録されているわけではないが、362号土坑から出土した頭部と、約40cm離れた遺物包含層から出土した胴部が接合したものである。土偶のプロポーションや文様帯構成、後頭部の隆起など、山形土偶に共通する特徴がある。

本遺跡では、他に約22m離れた地点から出土した土偶が接合した事例も報告されており、これらについて報告では「土偶が破壊されることを前提に製作された可能性とともに、ばらまかれる性格の道具であった可能性とがある」と分析している。



(6) 飯舘村日向南遺跡例

日向南遺跡は阿武隈高地北部、相馬郡飯舘村大字大倉に所在する。真野ダム建設に伴う発掘調査では、竪穴住居跡66軒、土坑134基、掘立柱建物跡2棟などが検出された。縄文時代早期から晩期まで断続的に営まれた集落跡である。土偶は21点出土した。

57号住居跡出土の土偶

57号住居跡は円形基調の竪穴住居跡で、直径3m強である。ピットは11個検出され、うち床面中央部の大形の2個は主柱穴と考えられる。炉跡は石囲炉が検出された。その他、床面南側に石組遺構が検出された。石組遺構は87×50cmの範囲に三

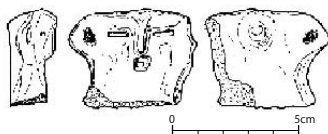


図11 日向南遺跡57号住居跡例

日月形に礫を半周させたもので、床面上にただ置いたような状態であった。報告では「祭祀的な遺構とも考えられる」としている。遺物は縄文土器片、石器類、土偶が出土した。後期末葉に所属する住居跡である。なお、床面北側には25×21cmの範囲内に1点の石核と剥片9点とがまとまって出土し、土偶は南側の石組遺構及び主柱穴とされたピット付近で出土した。

土偶は頭部破片で、鼻眉を隆帯で、目と口は沈線で表現し、^{みみたぶ}耳朶には貫通孔が見られる。後頭部に突出部があり、山形土偶の流れをくむものであることがわかる。

(7) 須賀川市松ヶ作C遺跡例

松ヶ作C遺跡は、須賀川市雨田地区、阿武隈高地西縁の丘陵に立地する、縄文時代後期中葉・晩期前半～後半の集落跡である。母畑地区の圃場整備事業に伴う発掘調査により、竪穴住居跡4軒（うち3軒は重複）、土坑3基、掘立柱建物跡1棟などが検出された。竪穴住居跡は加曾利B3～新地1式期、大洞B式期、大洞C2式期のものがあり、建物跡は大洞C2式期とされている。遺物は上記の時期の他、常世II式期、大洞B-C式期、大洞A式期のものが出土している。土偶は2点が出土した。

1号建物跡出土の土偶

土偶は、4本の柱穴からなる掘立柱建物跡の北西の柱穴から出土した。柱穴は長径70cm強の掘形を持ち、いずれも柱痕が認められた。建物跡の性格は、住居・倉庫・祭祀施設・埋葬に関連する施設などが考えられている。土偶を出土した層位は掘形埋土であり、土偶が本遺構構築時に埋められたことは明らかである。また本資料の遺存率が高いことから、本資料が意図的に埋納された可能性も考えられる。

土偶の背面に沈線と三叉状の陰刻によって渦巻文等の抽象的な文様を描いており、大洞C2式期の資料と考えられる。頭部・右前腕部・左腕部・右脚部が欠けており、報告では「意識的に～欠損している」とある。「意識的に」とした根拠は示されていないが、頭部は比較的丈夫な顔面中央付近で割れており、意識的に破壊した可能性はあるように思われる。

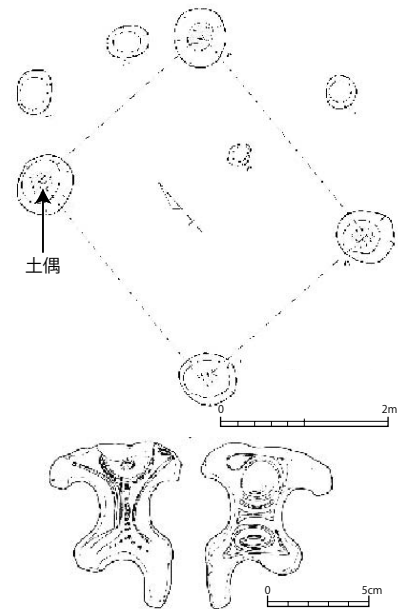


図12 松ヶ作C遺跡1号建物跡例



図13 松ヶ作C遺跡1号建物跡例

4 まとめ

これまで、まほろん収蔵土偶のうち、遺構から出土し、出土状況に言及されている事例を紹介してきた。その数は10例となった。今回調査対象とした資料は上述したように443点であるから、10例はわずか2%程度である。まほろん収蔵以外に事例を探してみても、県内では

三春町西方前遺跡の例などが知られるのみである(註5)。やはり大部分の土偶は、遺物包含層・遺構外から出土している。多くの土偶は土器や石器と同じように、不要になったものが捨てられたと考えてよいであろう。

しかし一方で、土偶が埋納・設置された、あるいは遺棄された状況を示す事例も、わずかであるが認められる。事例数が未だ僅少なため分析には適さないが、これらは縄文人の精神性を復原する貴重な手がかりになり得る。これらの資料と、遺物包含層・遺構外の資料の相違点はどこにあるのであろうか。土偶自体に差異は認められないため、土偶を用いた祭祀の作法・祭祀の段階の違いなどを示すのかもしれない。

また、遺物包含層・遺構外の資料についても、本当に無意識に捨てられたのか、検討する余地があるように思う。地形や周囲の遺構との関係など、土偶の出土状況にはなお追求すべき点が多く残されているが、今後の課題としたい。

<註>

- (註1) 展示の内容、展示開催の経緯については(財)福島県文化振興事業団 2010 『ふくしまの土偶』(平成22年度ふくしま里帰り展図録)を参照されたい。
- (註2) この点について小杉康は、「石囲いの施設や土坑墓などの遺構にともなう土偶造形の出土例が少ないために、その出土状態から土偶造形全般についての機能・用途を想定することは、あまりなされていない」と述べている(小杉2002)。
- (註3) まほろんHPの「文化財データベース」(福島県教育委員会 2001)により検索した。
- (註4) 中野幸大によると「大木8 a様式になると、有節沈線主体の施文技法は、おおむね沈線へと置き換わっていき、顔面形態の精巧さや体部への加飾が進み石生前型へと発展する」という(中野2010)。本資料は有節沈線が一部に残り、大木7 bから8 aへの過渡期に位置づけられよう。
- (註5) 三春町西方前遺跡94号土坑例では、大洞A'式期の土器とともに、底面から土偶が出土している。

<引用・参考文献>

- 野口義麿 1974 「遺構から発見された土偶 ～土偶の意義を探る 2」(江坂輝弥・野口義麿編『土偶芸術と信仰』古代史発掘3、講談社)
- 米田耕之助 1984 『土偶』ニュー・サイエンス社
- 中野拓大 1992 「鳥頭形把手付土器小考 一矢大臣遺跡の資料を中心として一」(小野町教育委員会『矢大臣(新田)遺跡』第6編)
- 小杉 康 2002 「神像が回帰する社会一前期末葉以降の本州北東域一」(安斎正人編『縄文社会論(上)』同成社)
- 中野幸大 2010 「東北地方南部における中期中葉の土偶 ～福島県内を中心として～」『シンポジウム 土偶研究の現状と課題 資料集』栃木県立博物館
- 福島県教育委員会他 1984 「上ノ台A遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告V』
- 福島県教育委員会他 1985 「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告19』
- 三春町教育委員会 1987 「西方前遺跡II」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書III』
- 福島県教育委員会他 1988 「羽白C遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XII』
- 福島県教育委員会他 1989 「羽白C遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIII』
- 福島県教育委員会他 1990 「日向南遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XV』
- 福島県教育委員会他 1991 「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告11』
- 福島県教育委員会 1991 「松ヶ作C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告30』
- 福島県教育委員会 2001 「福島県文化財センター白河館文化財データベース」 <http://www.mahoron.fks.ed.jp/search.html>
- 福島県教育委員会他 2003 「高木・北ノ脇遺跡」『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告3』